

皆様、明けましておめでとうございます。

令和7年、2025年の年頭にあたり、謹んで新年のご挨拶を申し上げます。

はじめに、医学部附属病院の方々におかれましては、年末年始を含め、患者様への献身的なケアや支援に全力を尽くしてくださいました。心より感謝の意を表させていただきます。

令和7年の新春を迎え、皆さまと共に新たな一年をスタートできることを、大変嬉しく思います。

さて、昨年は1月1日元旦に能登半島地震が発生し、多くの方々の生活に大きな影響を与えました。この場をお借りしまして、被災された皆様に改めてお見舞いを申し上げますとともに、一日も早い復旧を心よりお祈り申し上げます。

また、災害派遣医療チーム D-MAT をはじめ、被災された方々への対応に尽力された本学教職員学生の皆様に、深く敬意を表します。

昨年は、気候変動の影響が続く中、台風や豪雨などの自然災害も多く発生しました。このような災害が私たちに教示したことは、地域との連携の重要性と、教育・研究を通じた社会貢献の役割です。本学でも、被災への備えや地域防災の知見を深める取り組みを一層推進し、地域社会に寄り添う大学として、さらなる成長を遂げたいと考えております。

さて、2024年は、文部科学省中央教育審議会大学分科会「高等教育の在り方に関する」特別部会委員としての活動をはじめ、学長招待特別講演会にお招きした有識者の方々や、また県内の企業・自治体・金融関連など、本学を支援してくださる皆様との意見交換を通じて、山梨大学の地方大学としての役割や使命、さらには今後のあるべき姿について改めて深く考える一年となりました。

また、商工会議所や経済同友会をはじめとする、産業界・自治体・金融機関・教育機関での講演や会議における発言、山日新聞の意見広告掲載、高等教育関連の雑誌への寄稿といった様々な機会を通じて、山梨大学の現状と課題、地方国立大学としての役割や将来像について発信する場にも恵まれました。

私が特に重視して発信してきたことは、本学が持つシーズ、つまり、山梨大学がどのような人材育成を行い、どのような研究に取り組んでいるかを、地域の皆様に理解していただくことの重要性であります。

また、地域のニーズを大学がしっかりと受け止め、それに応じてシーズを発展させていくこと、不足している要素を補完していくこと、さらにはさまざまな工夫のもとに新しいシーズを創成していくことが、必要であると実感しております。

山梨大学は地域の課題解決に主体的に関わり、地域を牽引していける存在でなければならないと実感しており、これが地方国立大学の本来の役割・使命であると考えています。

山梨県唯一の国立大学として、山梨大学が果たすべき役割や、これからのあるべき姿について、

今年も引き続き、皆様とともに真剣に考え、その実現に向けて共に歩んでいきたいと思っております。どうぞ一層のご理解とご協力を賜りますようお願いを申し上げます。

昨年は、本学名誉博士である大村智先生との関係が一層深まった一年でもありました。

昨年4月には、分野横断的な研究組織として「大村記念微生物資源研究フロウティラ」が発足いたしました。この組織では、大村先生とゆかりが深い、微生物分野の研究を基盤に、大村先生が所属されている北里大学と連携し、微生物資源を活用した創薬研究を推進し、人類の健康と福祉に貢献することを目指しています。

そして、本学の新たな強み・特色のある研究センターと発展させるべく、支援を進めております。

微生物分野のみならず、これからも、クリーンエネルギー、先端脳科学、発生工学、ワイン科学といった本学の強みである研究や、学域学部の垣根を超えた融合研究の推進はもとより、新たな強みとなる分野の開拓にも注力してまいります。

加えて、全学的な研究力の底上げに向け、制度面の整備や、研究時間の確保に向けた取り組みを、一層強化していく所存であります。

また、昨年の12月11日には本学の「大村智記念学術館」をリニューアルいたしました。

今回、新たに大村先生より、ノーベル賞をはじめとする貴重なメダルや賞状、多くの関連資料を寄贈いただきました。これらの品々は、まさに学術の象徴であると同時に、後進の学びを支え、挑戦への道しるべとなる、極めて重要な意義を持つものであると考えております。

私は、今回のリニューアルを通じて、未来を担う児童生徒、そして学生たちが、自分たちの「無限の可能性」を信じ、失敗を恐れることなく挑戦し続けることの大切さを実感できる「知の拠点」となることを、真に願っております。

私は、今年を象徴する漢字として「繋（つながる）」を選びました。この漢字には、人々が、そして社会が、「つながる」ことの大切さ、さらには新たな未来を創り出すための、結びつきの力の必要性が込められています。

大学は、「知の拠点」として、地域や社会と深く繋がり、共に発展していくことが求められています。その中でも、産業界、行政、金融機関との連携、いわゆる産官学金の協働は極めて重要です。

企業との共同研究を通じたイノベーションの創出、行政と連携した地域課題への対応、金融機関と協力した地方創成の強化など、これらの取り組みをさらに推進し、本学山梨大学が地域と世界を繋ぐ大学でありたいと考えています。

また、大学内における「繋がり」も、私たちが前進していくための基盤です。教員、職員、学生が一体となり、お互いの気持ちを慮り、それぞれの役割を超えて協力することで、教育と研究の質

を高めることができます。特に「教・職・学」のつながりを深めることによって、学生一人ひとりが主体的に学び、成長できる環境を築いていきたいと考えています。

「繋がる」力は、人と人、組織と組織を結びつけ、相互に影響し合いながら新しい価値を生み出す原動力です。今年、この「繋（つながる）」をテーマに、さらに多くの出会いと協働を実現し、本学のさらなる発展と地域社会への貢献に全力を尽くしていく所存であります。

結びに、皆様お一人おひとりが、くれぐれも健康にご留意され、新しい年が皆様お一人おひとりにとって、より実りのある素晴らしい一年となりますことを、心より祈念いたしまして、令和7年、2025年の年頭のごあいさつといたします。

本年もどうぞよろしくお願い申し上げます。

令和7年1月6日

山梨大学学長 中村 和彦